



『ザ・ジャパン・パンチ』とハムレットの独白

田中, 雅男

(Citation)

近代, 55:41-72

(Issue Date)

1980-02

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001631>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001631>



『ザ・ジャパン・パンチ』とハムレットの独白

田 中 雅 男

ハムレットの第四独白の翻訳は今日迄のところ三十種を越える。その先陣を切って、わが国に初めて現れた翻訳は「アリマス・アリマセン」で知られているもので、それはまたシェイクスピアの初めての翻訳でもあった。それは、幕末明治にかけての四世紀の長きにわたって、通算二二〇余号の刊行を誇った月刊漫画雑誌『ザ・ジャパン・パンチ』、一八七四年第一号⁽¹⁾の中に掲載されたものである(図1)。

この漫画の存在については古くから一部で知られていたが、神代種亮の紹介で広く関心を持たれるに至った。彼は『明治文化全集』(日本評論社)の折込み月報『明治文化』第一号(一九二七年)に、「ハムレット独白の日本訳」という一文を発表した。その中で彼はローマ字訳の解説を試み、そこに用いられた語彙の中に「横浜の俗語」や、英語と日本語の「双生児言葉」が混じっていることに注目した。更に彼は題目に「新しい日本の芝居」とあるが、一体何をさすのかと、挿絵にも興味を示したが、何故漫画雑誌の中にハムレットの独白を入れたのか解しかねていた。「晝中右方の『シバキゴヤ』は舞台の意であろうが、左方の『シエクシビル』は中央の人物(丁髷姿)を指すものではあるまい。舞台上の人物は恐らくは、ハムレット皇子なのであろう」としたに止まった。

Extract from the new Japanese Drama
Hanureta san, "Danumarku no Kami," proving
 the plagiarisms of English literature of the 16th
 Century



Arimas, arimasen, are wa nan deska :-
Moshi motto daijoubu atama naka, itai arimas
Nawa mono to ha ichiban warui takusan ichiban;
Aruu ude torimas muko mendo koto umi,
Soshite, bottery itashimas o shunai?; Shundanji, nereu
Mada; - sorekara, nereu de hanashi mo yoroshi
Kokoro itai to issen mainichi bonkoty
Ushi ototsan arimas. sore wa dekimashita mono
Takusan skimashita, Shindanji; - nereu; -
Nereu! okata nise haikin; sayo ahira skoshi
serampan;
Kara ano shindanji no nereu, nani nise haikin
dekimas
Kono nangei shundanji mono jiggy shimashita,
Skoshi mate sinjo:

Vos valete, et plaudite
Anata sayonara, soshite te pompon.

やがて、この漫画への関心は、作者の意図を探ることから離れて、二つの方向へ分岐していった。一つは翻訳そのものへ向けられた関心である。その先鞭をつけたのは重久篤太郎である。彼は「横浜方言洋語考」（一九三二年）と題して、初期の居留地において発生した一種の混成語（*lingua franca*）であるいわゆる横浜言葉（*Yokohamamese*）の資料を紹介する中で、このローマ字訳を取り上げたのである。そして、その中に出てくる「ボバリ」、「セランパン」、「ピギー」の三語について、語源の解明を試みた。この論文は後に彼の『日本近世英学史』（教育図書、一九四一年）に再録され（七九—九九頁）、ローマ字訳に対する興味を一層広範に喚起することとなった。近くは小玉晃一・敏子著『明治の横浜』（笠間書院、一九七九年）第一章「横浜と英語」（敏子担当）においても、この翻訳への言及が見い出せる。むろん漫画の意図の解明は関心外であった。

もう一つの関心は日本におけるシェイクスピア紹介の一駒を見る、文学演劇上の資料としてのものである。豊田実は「日本におけるシェイクスピア」（『日本シェイクスピア協会々報』二号、一九三一年）、「日本に於けるシェイクスピア紹介の歴史（明治十五年迄）」（『文学研究』第一輯、一九三二年）と、精力的に日本でのシェイクスピア受容の歴史を展開し、そこでこの漫画を紹介した。しかし後に出版された『日本英学史の研究』（岩波書店、一九三八年）では、この漫画の写真を掲載してはいるものの、「To be or not to be ; that is the question : が Arimasen, are wa nan deska と訳され、あとも、こうした調子のものであって、まじめな訳とは思われない」と記しているのみで（三六三頁）、シェイクスピア紹介で果たした役割には否定的になっている。しかし漫画だから「まじめな訳でない」と切り捨てるだけでは、その漫画の意図を説明したことにはならない。

その二つに分岐した関心は、河竹登志夫によって再び一つに結ばれることになった。彼は『日本のハムレット』（南窓社、一九七二年）において、この漫画全体に目を向け、ローマ字訳の解読を行った上で、次の四つの理由から、

それが実際に上演された可能性を指摘した。(一) 見出しは素直に受取ってよい、(二) 絵は芝居小屋の様子を具体的に写している、とりわけ舞台前縁の四個の箱状のものはガス灯によるフットライトで、当時すでに横浜の劇場では、それを仕込んだものがあった、(三) 訳文の終りのラテン語は役者の実際の挨拶か、観客の拍手を写したものと考えられる、(四) 当時すでに横浜では何らかの形において外国劇が紹介上演される条件、可能性が備わっていた。そして、その可能性の上に立って、上演された場をいろいろ推測している(四七―六七頁)。ローマ字訳解説については、その後『学鏡』(一九七三年一二月号)に「ハマ言葉とハムレット」(『統比較演劇学』(南窓社、一九七四年)の中に「独白訳と稀書『横浜方言演習』」として再録)という題で若干の補足修正を行った。

しかし、ここにおいても、これを描いた漫画家の狙いとは無関係に考察が進められているために、せつかくの推測も俄かに信じ難いものとなっている。丁髷姿のハムレット、それに珍妙な日本語の台詞——実際の上演があったとすれば、この漫画はその上演の滑稽さを多少誇張して描いたに過ぎなくなるが、はたしてそうであろうか。そしてその訳が「まじめな訳でない」としても、一体誰の訳なのか。これを雑誌全体の中に戻して、もう一度、漫画として問い直して見る中で、それらの答を考えてみよう。

二

先ず分析に入る前に、この漫画が掲載された『ザ・ジャパン・パンチ』の特徴について考えておこう。その雑誌の執筆者兼発行人チャールズ・ワグマン(Charles Wigman)は、本来『ジ・イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の美術特派員であった。そこに掲載された数々の報道面を見る限り、彼は精緻な自然主義的写実に長じていた。どこで絵を学んだかは不明だが、退役陸軍大尉であったことから推すと、陸軍学校時代、戦地での即写習練として細密画を学んだ可能性はある。⁽²⁾ その彼が、無味乾燥な居留地で本国に目を向けて生活している人々を慰安するため

漫画雑誌を刊行したのである。そこに描かれた漫画がしっかりしたデッサン力を基礎にしているのは当然である。

しかし、この種の雑誌としては異例な程、多く号を重ねることが出来た秘密は彼の素材の扱い方にある。居留人の出入りは激しかったが、一八六八年、居留地取締長官の選挙のため所属国領事館に登録された選挙資格者、つまり居留地内の借地人（中国人は除く）の数は六〇〇名に満たなかった。⁽³⁾その後居留人の数は漸増したが、この雑誌が廃刊（一八八七年）になる頃でも、欧米人の数は一五〇〇名を越えなかった。⁽⁴⁾（維新前後英仏の軍隊が駐屯したことがあったが、彼らの目には軍服しか映らなかつた。）つまり、自由な出入りが許されない居留地内であつて、その数は大半が顔見知りでいられたことを意味する。しかもその中のかんりの人が、激動する日本の政治の趨勢に深く関わつていた。イギリス公使パークス (Harry S. Parkes) とフランス大使ロッシュ (Léon Roches) はその双壁であつた。

ワグマンは、居留人に購読を期待するためには、居留地に起こる種々の事件、政治上のものが最善と考えたようである。日本人の開化趣味等を皮肉つたところもあるけれども、大半は身近な出来事を素材にしている。限られた社会で漫画の対象に選ばれた人物は、大半の購読者にとって、単なる顔見知り以上の人物であつたに違いない。それどころか、ワグマンは自分の友人まで漫画に登場させた。そして腹を立ててどなり込めば、それを又漫画にした。⁽⁵⁾

正確なデッサン力を下敷に、時には誰の目にもそれと分るよう似顔絵風に、時には写真に近く、時には大胆なデフォルメを加える。時局諷刺のように周知の物語の枠組を借りてメタモフォーズを行うこともある。しかし、いかなる場合も、身近な素材であればある程、辛辣さをユーモアで包み込む周到さがある。そこそがこの雑誌の身上であつた。それがなければこの雑誌がそんなに長続き出来なかつたらう。だが、それはまた時代を隔てた今日余り顧みられない理由ともなつてゐるのだ。

Our Local Hamlet!
 "King: To England send him, or confine him where your
 wisdom best shall think."
 "Polonius" "It shall be so.
 Madness in small ones must not
 unwatched go."



図 2

三

さて、それでは「ハムレットさん」を関連のある二種類の系列の漫画の中で見直すことにしよう。その一はシェイクスピアの場面を借用したもの、その二は実際に上演されたことが確認出来る舞台を扱ったものである。

シェイクスピアはいろいろな形で借用されている。絵そのものではなく、表題や説明に作品名や台詞の一部が添えられている例は、何枚かあるが、この際大して参考にはならない。参考になるのは作品の一場面を借りて対象を漫画化した場面である。「『マクベス』からの一場面」(一八六八年第三〇号)では、パークスをマクベスに、「ザ・ジャパン・タイムズ」社長リカビー(Charles Rickerby)をマクベス夫人に見立てて、大坂開市に備えイギリスの進出計画を練る様を描き、『「ロミオとジュリエット」の一場面」(一八八三年十二月号)と「もう一

つの調定」(一八八四年二月号)では、山手に建設中の公会堂(新ゲイアティ座)の資金繰りがつかず、紛めている設立母体の協会内の有様を、キャピュレット、モンタギユ両家になぞらえた。

とりわけ、丁髷姿のハムレットが登場する「おいらが田舎のハムレット」(一八七〇年第四号——図2)は注目に値する。クローディアスに擬せられているのはパークスである。ハムレットが誰か定かではない。その男は最近パークスにとって目障りな存在らしく、王とポローニアスの間で次のような対話がなされている。

王——イギリスへなと送るか、そちの叡智をもって一番良いと思うところへ閉じ込めておけ。

ポローニアス——御意のまゝに。小者の中の狂気は見逃すわけにはまいりません。

このハムレット氏は、この号の前後にいろいろな姿で現われている。同じ号では「帝国蚕糸委員」の表題で蚕を見つめる三人の中の一人になっている。生糸は主要輸出品であったが、乱買で次第に粗悪化が目立ってきた。そこで外国側からイギリス公使館参事アダムズ(F. O. Adams)が横浜の三会社の生糸検査役を随え、養蚕地帯の視察に出かけたことがある(一八六九年)⁽⁷⁾。ハムレット氏はそのアダムズを指しているのかも知れぬ。ついでながら、このハムレット氏、一時帰国するパークスを港で見送るの図がある。右手にはパークスがかぶっていた赤い軍帽、左手には笏をかざし、淋しげな他の見送人とは対照的に、得意満面で立っている。題して「オセロの支配は終わった」(一八七一年第三号)。

問題の「ハムレットさん」では、丁髷姿の思案顔のポーズが、河竹説では日本語上演の可能性の一つの決め手とされているわけだが、「おいらが田舎のハムレット」におけるように、他に丁髷姿で現われていることもあるので、それ

The Wagner Festival
 In Bayreuth ist am 29^{ten} September die erste
 anführung des Wagnerischen Nibelungenmusikdramas
 beendet

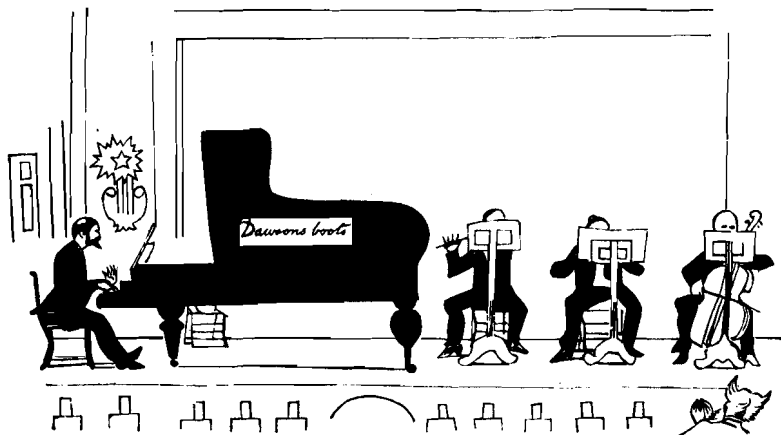


図3

が上演のスケッチでない可能性もあるということになる。ただこれらの絵と根本的に違う点は、顔に誇張がなく、特定人物の攻撃に主眼が置かれていないことである。

四

それでは、劇場の情景を素材としたものの中に置いてみればどうか。当時本町通りにゲイアティ座 (The Gaiety Theatre——通称ゲイテ座) があった。前述の山手公会堂が出来て、それが閉ざされるまで、そこは西洋人の手になる唯一の専用劇場であった。ワグマンはそこでの上演を何度か漫画にしている。しかしその大半は音楽会のものである。

描き方は、他のテーマの場合もそうであるが次の二種類に分類出来る。

(一) 絵と説明の落差を利用しておかしみを誘う方法——例「ワグナー祭」(一八七六年十月号——図

3)。絵そのものはかなり忠実に音楽会の模様を伝えているが面白味は少ない。「九月二十九日、バイ

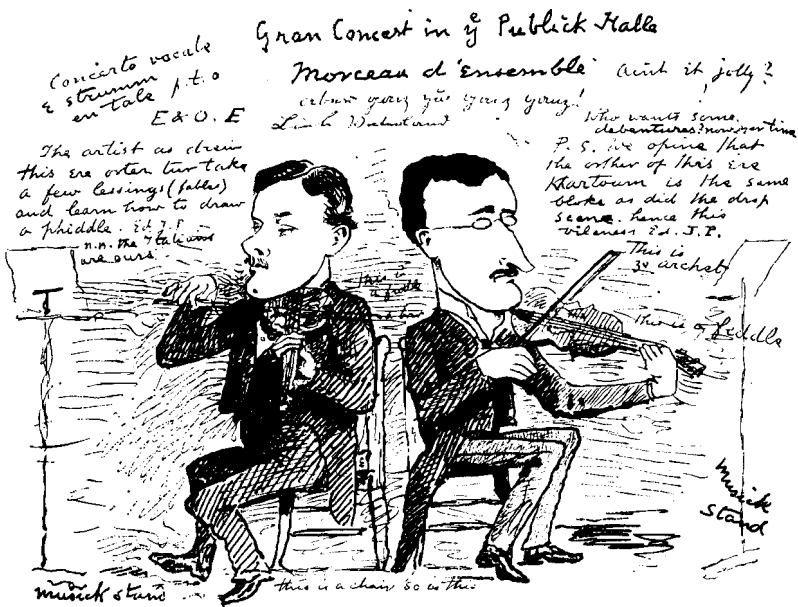


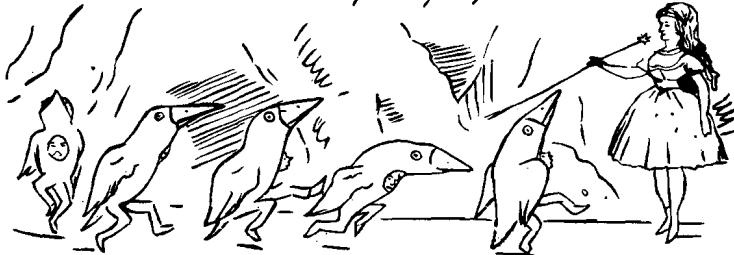
図4

ロイトでは、ワグナーのニーベルンゲンの楽劇の最初の指揮（上演）は既に終了していた」という説明は、その音楽会が横浜在住の音楽家ワグナー（C. Wagner）の指揮で行われたことを知れば、⁽⁸⁾ 思わず吹き出してしまふ。居留地のわびしい音楽会の開かれた一か月前バイロイトでは、祝祭劇場完成を祝って、こけら落しに『ニーベルンゲンの指環』が大編成で上演されたのである。説明文中「上演」(auführung) とすべきを「指揮」(anführung) としたのは単なる誤りではない。

(二) 絵そのもののおかしみに支えられているもの——例「公会堂での大演奏会——全体の一部」(一八八五年四月号——図4)。山手に完成した公会堂の開場を記念するため横浜アマチュア管弦楽団による演奏会が開かれたが、これはその模様を伝えるものである。⁽⁹⁾ 演者の顔が似顔絵風に誇張されていて読者にはそれが誰か一目瞭然だったはず、背中合せの構図は相手かまわぬ演奏ぶりを表

(La suite au prochain numéro)

We are merry cocky, jolly birds.



Three cheers for the Yokohama Amateur Dramatic Corps!!!

図 5

現しひどい出来ばえを暗示する。誤字だらけのなぶり書きは、絵を
際立たせる役をはたすにすぎず、「これはヴァイオリン」「弓」「これ
もこれも椅子」「譜面台」等々無くてもがなの説明ばかり。ただ絵
の意味を知って表題を読めば、「Morceau d'ensemble」は表向き
の「全体の一部」という意味の裏に「調和の断片」という皮肉な意味
を読みとることが出来る。

ゲイアティ座では音楽会に比べると、言葉の障害があるためか劇
の上演数は少なかった。そのためワグマンも殆んどこの雑誌には
取上げていない。目についたものは僅か二枚しかない。そのうち一
枚の「わたしたち楽しいコッコちゃん」(一八七五年五月号——図
5)は、アマチュア劇団の上演した『森の赤ん坊』の一場面である。

数人の日本人の子供が——日曜学校の生徒と思われるが——小鳥
に扮して出演した⁽¹⁰⁾。あどけなさがよく現われ、縫いぐるみから顔を
出しているおかしみがあるものの、写実的であるためか、頁の下に
埋め草として扱われているにすぎぬ。マビル一座 (Mabille Troupe)
の来日予告記事(一八六八年第七号)の下に想像図だが、同様の写
実的筆致による団員の群舞の図が埋め草としてあしらわれている。
それらは舞台をスケッチしただけでは素材の面白味は伝え得ても漫



The farewell Banquet given by the members of the Community to the late Editor of the "Mail" was a brilliant success both physically and aesthetically. We wish him every happiness and may Beethoven's Sonatas in B flat continually charm his ears and may the sound of the violin never cease in the land he is going to. We take this opportunity to offer for sale the stock and goodwill of our Paper for the moderate sum of \$100,000. cash. Adoo!

The A.D. Corps has covered itself with glory in the "Critic" the acting was superb.



画にはならないことを示すものと考えてよい。

もう一枚は、シェリダン (Richard B. Sheridan) の『批評家』の上演を踏まえたものである (一八七七年一月号—図6)。その劇は何度か上演されているが、これはその年の一月十日の上演を踏まえたものである。ただし単なるスケッチ画ではない。劇中劇の悲劇中の人物に扮すると思われる役者の身元を明かにする関心を押え、傍らで拍手を送っている人物が似顔面になっている。同じ号の巻頭にも「批評家」という表題の漫画があり、それを合わせればこの意味は明瞭になる。実はこれは「ザ・ジャパン・メール」の主筆の交替劇に関わっているものなのだ。イギリス人ハウエル (W. G. Howell) はリカビーの「ザ・ジャパン・タイムズ」を買収、「ザ・ジャパン・メール」を刊行した。一時は日本政府の御用新聞として販売部数を拡大したが、ブラック (John Reddie Black) の「ザ・ジャパン・ガゼット」に押され不振となり、主筆をディケンズ (Dickens) に譲ったのである⁽¹¹⁾。この漫画は彼を送る図で、頁の上段の挿絵中央が彼である。彼はそれ迄再三この雑誌に登場した。自らヴァイオリンを弾くが、新しい音楽には理解がなく耳を塞いで逃げ出す⁽¹²⁾。それでいて一廉の批評家であつたらしく、前掲のワグナーの音楽会 (図3) で、客席から一人拍手を送っているのは彼の後姿で、「ハムレッツさん」の舞台のかぶりつきにいるのも彼らしい。その男が今主筆の座を失い、批評の健筆を振るう場がなくなった。頁下の絵はそれを皮肉ったものである。右手に立ち拍手を送っている鬚つらの男は後任の主筆ディケンズ、その横でそっぽを向いているのが彼である。シェリダンの『批評家』が劇中で演じられる悲劇を批評する批評家を登場させたパースク劇であるだけに、新聞の批評家たちをさしずめダンクルやスニアになぞらえて、皮肉を利かせたのである。役者へ注意が向かないよう描かれている所以である。

このように見てくれば、ワグマンは単に素材の面白さに寄りかかただけでは満足しなかったことは明白である。「ハムレッツさん」の場合、絵は特に誇張の少ない写真風であるが、表題とローマ字訳の間に挟まれて密接な結びつき

を示しているから、単なる埋め草ではない。しかし、河竹説のようにこれを何らかの形の上演を写したものとすれば、その面白味は素材に内在するものになってしまふ。せいぜいのところ、作者の介入できる余地は、実際の台詞を若干誇張するだけである。

そうではなく、この漫画全体が創作であると考えた時、その中にワグマン流の皮肉を読みとることが出来るようになる。彼は珍訳への関心を妨げないように絵は出来るだけ写実風に描いたのではないか。劇場内部の道具立てが写実的であるからとはいえ、登場人物の姿まで実景とはいえない。ほかにも和服のハムレットが登場していることは前節で述べたところである。そうすれば実際の上演があった如く装って付けた表題に皮肉が生じる。表題には「一六世紀英文学からの剽窃、新しい日本の芝居」「ダンマルクの守」「ハムレットさんからの抜萃」とある。そこで言う「剽窃」は実際にあつたことになっている。「新しい日本の芝居」のことを指しているはずだが、実は彼自身のこの漫画を指すことになるからである。

五

次にローマ字訳に目を向けよう。それははたしてワグマンの手になるものなのか、もしそうならどのような意図を持って書かれたのか。やはり雑誌全体の中で見てみなければならぬ。それに先立ってローマ字訳をあげてみよう。

Arimas, arimases, are wa nan deska ; —

Moshi motto daijobu atama naka, itai arimases

Nawa mono to ha ichiban warui takusan ichiban ;

Arui ude torimas muko mendo koto umi,

Soshite bobbery ⁽¹⁾ iashimas o shimai! ⁽²⁾ Shindanji; — neru

Mada; —sorekara, neru de hanashi mo yoroshi

Kokoro itai to issen mainichi bonkoltz ⁽³⁾

Ushi ototsan arimas—sore wa dekimashita mono

Takusan skimashita, Shindanji; —neru: —

Neru! okata nise haikin; sayo achira skoshi Serampan; ⁽⁴⁾

Kara ano shindanji no neru, nani nise haikin dekimas

Kono nangei shindanji mono piggy ⁽⁵⁾ shimashita,

Skoshi mate sinjo:

Vos valete, et plaudite

Anata sayonara, soshite te pompon.

(おのち) ありません あれ わ 何 ですか

To be or not to be: that is the question

も) も)と 大丈夫 頭 中 痛い ありませ

Whether 'tis nobler in the mind to suffer

繩もの と 刃(矢) 一番 悪い たくさん 一番

The slings and arrows of outrageous fortune

或い 腕 取ります 向う 面倒 事 海

Or to take arms against a sea of troubles,

そして ボベリ いたします おしまい、死んだんじー寝る

And by opposing end them. To die—to sleep,

未だ それから 寝る で 話 もう よろし

No more ; and by a sleep to say we end

心 痛い と 一千 毎日 ボンロシ

The heartache, and the thousand natural shocks

牛 お父っつぁん あります それ わ 出来ました もの

That flesh is heir to. 'Tis a consumation

沢山 好きました 死んだんじ 寝る

Devoutly to be wished To die—to sleep.

寝る、大方 質 拝見 左様 あちら 少し セランパン

To sleep—perchance to dream : ay, there's the rub,

から あの 死んだんじ の 寝る 何 質 拝見 できます

For in that sleep of death what dreams may come

この 長い 死んだんじ もの ピギー しました

When we have shuffled off this mortal coil,

少し 待て 進上。

Must give us pause.

あなた さよなら そして 手 ポンポン

Vos valete et plaudite.

(1) *bobbery*—'opposing' の訳語らしい。「騒動」「けんか」の意。OEDによれば、*binz*—語の *brap re* (ああ父よ) という感嘆詞から出たものという。また一説によれば、スペイン語の '*boberia*' (愚行) から出たともいう。

(2) *shindanjii*—「死ぬ」「死」の意の横浜なまり。

(3) *bonkatz*—'shocks' の訳語。「罰」の意。擬音語か？

(4) *serampun*—「物を破壊すること」の意。マレー語の *serampang* (やす・もりの類、物にめがけて投げる) から出たとされている。

(5) *piazy*—日本語「ペケ」(駄目)に当る。マレー語 '*pegi*, '*pati*' (駄目、止めなさい) から来たとの説が有力。中国語「不够本」(*pu-kou-pen*) (日本語「ポロペン」) の「不够」から出たとの説等、いろいろな語源説がある。

フーグマンはこの雑誌で見るところ、相当なポリグロットであったようである。日本語は特に堪能であったはずである。一八六一年日本へやって来て以来、取材で方々に出かけている。とりわけ来日早タイギリス公使一行に取材で同道が許され、通詞アーネスト・サトウ (Ernest Mason Satow) の知己を得て、共に遊んだ。一八六二年頃には日本人小沢カネと結婚し、六四年には彼女との間に長男一郎が誕生している。更に日本人の絵の弟子が入りするようになる。後に明治画壇で名をなす、五姓田義松、高橋由一、小林清親らであった。彼はいわば日本語の良き先生たちに取り囲まれていたのであった。「ハムレツさん」を書いた頃 (一八七四年) には、相当日本語は堪能であったと考え

て差支えない。

さて、いろいろの国の人々が交流する居留地で、言葉の障害は意志の疎通を困難にさせ、しばしば滑稽な場面を繰り広げた。それが日本語のみならず、多国語に通じていたワーグマンの餌食となったとして当然である。話し言葉はもちろん、誤字だらけの外国人の書いた英文、自国語の単語を混じえた外国人の英文など格好の材料であった。中でも日本人との接触は必要火急なものであっただけに、言葉の障害は深刻で、それ自体漫画になった。

一八六七年三月号には、次のような話が紹介されている。汽船からはしけで陸へ向かおうとする外人の話である。

日本語の分らない外人が船頭に自分の意志を伝えようとするが通じない。そこへ日本語の入門書を半時間ばかり学んだ男が助太刀を買って出るが、これも通じない。その本に「確実に理解させるためには、如何なる時でも、その国の金を出せば役に立つ」というパンチ様の脚注がついているのに気付き、その通りにすると、船頭は、

「へい、只今。分りました。」

日本へ着いたばかりの外国人の苦勞は、ほぼそのようなものであったろう。漸く操れるようになった日本語もどことなく怪しい。絵に添えられた外人の喋る日本語はそれを写している。

Konoaidano tsugunai kin wo haraimasen to hidoi me ni awaseru zo

(この間の償い金を払いませんと、ひどい目に会わせるぞ——一八七四年一号)

Yuhan ikutz wo tabemashta ka

(夕飯いくつを食べましたか——一八八一年七月号)

Okainasai ichiban yasui sa sa!

(お買いなさい、一番安い、みあそあそ——一八八四年四月号)

一方、日本人の使う英語も的になる。

Anata kondo motto yoroshi leading articles wo writimassen nara pay wo stopimasho.

(あなた今度もっとよろし社説を書きませぬなら、仕払いを停めませう。——一八八二年一月号)

攻撃の対象は實際に交されている会話にとどまらなかつた。速成の語学学習書にも向けられた。その一例を示そう。

Easy lessons in Japanese after the manner of the Japan Herald (only better spelt)

The present policy of the Japanese Government is and as will make it cornuscate in the eyes of foreign powers in one Glorious halo of Brilliancy shedding a lovely flood of light as it settles in the azure depths of the waters of Nippon.

Nihon Seifu no to setzu no Koron wa Gwaikoku ni taishte sono kuni hikarashimashō. G'wōdai no go kō wo motte rippa na akari mawari tehete. Dandan ni Nihon no umi no ai iro no fukasa shidzunde oru.

(日本政府の当節の公論わ外国に対して、その国光らしきまじょう。廣大(づ)の後光をまうて立派な明り周り照

って (う) 段々に日本の海の藍色の深を沈んでおる)

Do you see any green in my Eye?

Ore no me ni awoi mono wo miyashineika?

(俺の目に青い物を見やしねえか)

Penny wise and pound foolish.

Tempo riko dora Baka.

(天保〔錢〕利口、ドゥラ (ドル) 馬鹿)

A contented mind is a perpetual feast.

Manzoku shita kokoro wa, suyedzue no sakamori da.

(満足した心わ末々の酒盛だ)

When the cat's away, the mice do play.

Neko oradzeba, nedzumi asobasaserare.

(猫居ぬや (ち) は、ねぢも遊ばせやんね)

Speech is silver. Silence is gold.

Hanashi wa gin. Heiko suru wa kin.

(話ち銀、閉口ちばね金)

Punch is a poor devil.

Punch to mose shito wa hanahada konku na Akuma gedo de gozarimas.

(パンチと申せしと(人?) わ甚だ困窮な悪魔外道でござります)

——一八六九年六月号

丁重な表現と野卑な表現が肩を並べ、妙にこなれた表現と逐語訳が入り混っている。「閉口する」(silence)、「困窮な」(poor)といった迷訳も交じっている。長いもので一部省略したけれども、全体を引用すればその雑多ぶりが一層めだつものだと考えてもらいたい。例文の選択(大半は創作であろう)とその配列はワグマン自身の工夫である。これは当時の学習書の実体を、多少誇張があるとしても、反映しているものであった。

ここで「ハムレットさん」のローマ字訳に目を転じよう。もし何らかの上演があって、その訳がその時の台詞を写すものであるとするならば、未熟で、誤訳が多いのは止むを得ぬとしても、基本は話し言葉の語順を保っていたはずである。日本人に紹介する意図を持ったまじめなものならばなおさらである。ところが、この訳には話し言葉として不自然な語順や言葉遣いがある。「向う面倒事海」(against a sea of troubles)、「からあの死んだんじの寝る」(for in that sleep of death)の語順とじつ、「面倒事」(troubles)、「出来ましたもの」(consumation)、「この長い死んだんじもの」(this mortal coil)といった説明的訳語は、むしろ当時流行の日本人のための英語入門書の文体を模したものである。当時挿訳(interlinear translation)と銘打たれた入門書が多かった。英語の例文の下に訳語を当て、漢文の返り点式に番号を付して全訳を示すものであった。この種のもは日本語で書かれたものが多いが、ワグマンなら読めたと思われる。

そういうえば誤訳の仕方にも作為が感じられる。

「腕取ります」(to take arms) —— 「武器」を「腕」と取り違える。

「たくさん一番」(fortune) —— 'forth one' 「(たくさんの中で)一番前のもの」とでも誤解したのであろう

か。

「牛お父っつぁんあります」(shocks) That flesh is heir to)——「牛鍋」におけるように「牛」が「(牛)肉」を表わすことがあった。それをひねったもの。この意味変化にフランス語から英語に入った *beef* を思い起したかも知れない。「肉体が相続した」を「(牛)肉の父親である」としたのは苦肉の策。

六

しかしこのローマ字訳を有名にしたのは、その中に居留地に生れた独特の言葉、いわゆる「横浜方言」の痕跡が見出せるからである。もっとも「横浜方言」といってもはっきりした実体を持っていたわけではない。外国人とそれを相手にした日本の商人、人力車夫、「チャブ屋」の女たちの間で使われた一種の「私生児的な言葉」である。しかしそれは閉鎖的な日本人の中に積極的に入り込んで来たという事情のためか、むしろ外国人の操る片言日本語といった方がよい。チェインバレン (Basil Hall Chamberlain) はそれを称して「ピジン日本語」と呼んでいる。⁽¹³⁾ その形成には、初期の頃日本人と外国人の間を仲介した中国人が一役買った。ローマ字訳に出てくる「サランパン」、「ペギー」、「ボバリ」等は中国人によって持ち込まれたものであろう。この「私生児語」はアーネスト・サトーの指摘するよう⁽¹⁴⁾に、「対話者相互の社会的地位を示す日本語のはなはだしい多称性と動詞の複雑な変化がなく」、「あります」「ありません」の守備範囲が非常に広がった。もちろんその言葉は居留地内でしか通用しなかった。

その「私生児語」に「横浜方言」という名を与えたのはアトキンソン (Hoffman Atkinson) であった。どのような人物であったか不明である。彼は『横浜方言演習』(Exercises in the Yokohama Dialect) なる小冊子を刊行した。いささかふざけ半分のところもあるが、その実体がある程度分るので有難い。チェインバレンはこの冊子を次の如く紹介している。

或る古くからの横浜の住人が、つましくも本名を伏せ、「本牧僧正」のペンネームで数年前この題目(ピジン日本語)について極めて面白い本を書いた。題して『横浜方言演習』。しかし真の日本語に精通しているものでなければ、そのユーモアを十分に味わうことは不可能であろう。問題の方言では「弁護士」は 'consul-bobbery-shio' (領事騒がせな人)、「歯医者」は 'ha-daikusan' (歯大工さん)、「燈台」は 'fune-haiken-sarampan-nai-tosoku' (船拜見破壊無い蠟燭)、「海上保険検査官」は 'sarampan-fune-haiken-danna-san' (難波船拜見旦那さん)等々と呼ばれている。出来ることなら「主の祈り」を 'Ootisan nikai arimas' (お父っちゃん、二階あります)という具合のピジンで訳したものがあればと思うが、恐れ多くて許されぬところである。⁽¹⁵⁾

事物を指す適切な単語を知らず、回りくどい説明を止むなくすることもあったろうことは、我々の経験から推して容易に想像のつくところであるが、そのような窮余の説明語句を覚えさず学習書が尋常なものでないことは明かである。⁽¹⁶⁾ところで「ハムレッツさん」の訳にも「夢みる」(to dream)を「贗拜見」としているところがある。

この『横浜方言演習』の発行年は不明である。一般に一八七〇年頃とされているが、それはウェンクステルン(Wenckstern)の『大日本書史』によって⁽¹⁷⁾いるだけで、そう定める根拠はないようである。ただ表題に「演習」とつけられたものは珍らしいが、丁度「ハムレッツさん」の描かれる前年にアーネスト・サトーの『会話篇——江戸口語演習二十五課』(Ernest Satow, *Kwaiva Hen, Twenty-Five Exercises in the Yedo Colloquial, for the Use of Students*, Yokohama, 1873)が出版されている。この冊子は当初から若干ふざけた意図を持っていたから、サトーの本の題名をもじった可能性はある。そうだとすれば本文は二十頁足らずのものだから、『会話篇』の出版を知って早々に出版されたものと考えられ、ワーズマンの漫画との関連が認められることになる。

ワーグマンが居留地で耳にする片言日本語をいろいろな機会に取上げていることは既に紹介したところであるが、居留地内ではか通用しない特殊な語彙をあげつらったもの、つまりいわゆる「横浜方言」を扱ったもの、は二枚しか見出されない。一枚は問題の「ハムレンさん」、もう一枚は挿絵のない長文の戯文である。ところがそのいずれも同じ年に現われたのだ。とりわけ後者には、アトキンソンの冊子の表題に用いられているが、当時としては市民権を得ていない「横浜方言」という語を用い、それを問題としてしているのである。その主要部を引用しておこう（一八七四年五月号）。

The following telegraphic messages between the Government on the one hand and Okuma on the other hand will interest our readers. It will be observed that the Yokohama dialect has been selected on account of its simplicity and therefore specially adapted to telegraphic despatches.

Govt to Okuma, Nagasaki. Taiwan maro maro peggy. ⁽¹⁾

Okuma to Govt, Yedo. Maro arimas. ⁽²⁾

G. Taiwan maro nai. Nankin bobby. ⁽³⁾

O. Nankin baka arimas watakshi maro.

G. Maro dekinasen. Tojin menoshta mina bobby. Fune maro dekinasen, hanashimas. ⁽⁴⁾ ⁽⁵⁾

O. Menoshta bi dam. Watakshi Taiwan maro.

G. Maro nai watakshi hanashimas. Tojin menoshta hanashimas. Tenura Rijenderu ichiban oki baka.

O. Rijenderu baka arimasen, taisan dorra raiki dorra arimasen, Nippon maro. Watakshi Taiwan maro.

G. Anata Taiwan maro nai watakshi hanashi. Oki hanashi, chisai hanashi maro yoroshi.

O. Orai, watakshi Taiwan maro nai, oki hanashi chisai hanashi nionichi maro. Saigo sakujizu maro Taiwan.

G. Orai. Watakshi anata Taiwan maro arimas, wakarimassen mina hanashi, watakshi anata maro nai yoroshi arimas. Nankin kaku kaku.

O. Sayonara.

G. Sayo.

(征韓論を退け、佐賀の乱を鎮圧した大久保政権は、一八七四年二月大隈らと計り、士族の不満をかわすため、台湾人の琉球人殺害を口実に、台湾遠征を企てた。しかし清国の干渉で事態は思った通り進行しなかった。これはその渦中に現われた戯文である。事件は結局十月三十一日、日清両国間の協定成立で解決をみた。)

(1) maro maro peggy — 駄目になる。(言うことを聞かぬの意か)

(2) maro arimas — 行きます。(台湾への出兵)

(3) Nankin bobbyery — 南京が騒ぐ。(清国がこの問題に干渉して来たこと)

(4) Tojin menoshita — 唐人(清国)の公使(minister)。(参考『横浜見物手引』の中、「異国重役」の表に「亜米利加 役名メノシタ人名ブライシ」とある)

(5) Fune maro dekimassen — 船を出せない。(この問題で英米が清国への配慮から、中立を守り、船の援助をしなかったこと)

(6) bi dam — E. 'be damned'

(7) Temura Rijenderu — 「テヌラ」(あるいは Tenura か)は不明。「リジエンデル」は外務省雇のアメリカ人 Charles William Legendre のこと。彼は台湾遠征を進言した。

(8) *taisan dorra raiki dorra*——不明。

(9) Saigo ——隆盛の弟、陸軍中将西郷従道のこと、政府が外国の干渉で征台を中止したが、彼は軍を率いて単独台湾へ向つた。

(10) *Nankin kaku kaku*——不明。

他に例がないのにその年に限って、二度にわたって、いわゆる「横浜方言」が取上げられたのは『横浜方言演習』の出版と関わりがあると考えられないだろうか。

なおついでながら、『演習』の二版三版について述べておこう。先に引用したチェインバレンの紹介文に見られるように、この冊子のその後の版には若干の曲折があって初版との間に誤解が生じがちである。ウェンクステルンによれば、本牧僧正の『横浜方言文法初歩』(*Bishop of Homoco, Elementary Grammar of the Yokohama Dialect*) というのがあって、それがこの二版に当り、一八七九年に出版されたことになっている。残念ながら初版再版ともに見えてあるが、本牧僧正の『改訂増補版横浜方言演習』(*Revised and Enlarged Edition of Exercises in the Yokohama Dialect*) は一八七九年三月出版で、その内容から察すると第三版に当る。同じ年に二版と三版が出たのか、それとも二版の出版年が間違っているのか。三版には二版の序文と新聞評に加えて、その版のための序文と二版の数倍に及ぶ新聞評が添えられているが、それは評判の程を誇示するまやかしで、それが事実上の二版とも受取れる。二版の序文には、この冊子がオレンドルフ・システム⁽¹⁸⁾に基づく速成用の学習書である旨宣伝し、新聞評にフンボルトの『宇宙論』、バートンの『憂鬱の解剖』に匹敵する書という記事を掲載しているが中味と大違いで、ふざけた意図をもって再版されたことは明瞭である。三版の序文、新聞評は、二版のそれに輪をかけるものではない。初版の作者と改訂者の関係は不明だが、本牧僧正はペンネームで、ウェンクステルンによればコープ(Cope)というのが

本名である。しかし競買人ということしか分っていない。当時のアスピノール・コーンズ商会 (Messrs. Aspinall, Cornes, Co.) の社員に F・A・コープという人物がいるが、同一人物だろうか。⁽¹⁹⁾

とこうで、『演習』には前述したような珍妙な説明語句がいろいろ紹介されているが、もう一つの面白きは、日本語の表記に際して、類似した音の英語の単語を用いて音訳 (transliteration) しているところにある。「お前の天保(小銭)」を 'O my tempo' 「按配悪いですか」を 'Am buy worry arimas?' 「芝屋小屋」を 'She buyer' と綴る類である。丁度三版が出た一八七九年六月号に、それをまじったような戯文が出ている。これも偶然の符号と思えないので、一部引用しよう。

I can give a Nitzoohon love song from the ninth volume of Man yea foo she foo. Give oh give the
⁽¹⁾
⁽³⁾ delectable ootar. List o keeke nass eye. ⁽⁴⁾

“Watarakooshee toe onyeh wahn

O Koorah no komb eh day hahn yo

Its kar yo knee day tay No Chee yow sang

Mamma toe nahroo.”⁽⁵⁾

(1) 日本、(2) 萬葉集、(3) 歌、(4) お聞きなさい、(5) わたしとお前は／お蔵の米でハーヨ／何時か世に出てノーチョイサ／飯となる。

ともあれ以上検討したところから、「ハムレッツさん」は『横浜方言演習』を含めて、当時流行していた語学書に矛盾先を向けたものであったと考えざるを得ない。当時出版された本に目をつけ、皮肉交りに紹介した記事もあるので。⁽²⁰⁾

その推測はあながち唐突とは言えない。そうすれば、この漫画は、そのような語学書で用を足せるのは所詮日常生活のレベルに限られることを皮肉る意図を持つわけで、ローマ字訳に力点を置いて描かれたことになる。挿絵の顔が特別の誇張もなく描かれているのは、そう考えれば納得が行く。

七

以上のところで「ハムレットさん」がワグマンの手になる創作で、報道画ではない可能性が強いことを指摘したつもりである。それでは何故『ハムレット』から情景を借りて来たのであろうか。それが読者にとって最も馴染み深い文芸作品の一つであったことは確かだが、ここに一つの興味ある符合がある。

折しも一八七三年暮、つまりこの漫画が出来る一か月程前、イギリス人の旅役者ポーンズフォート(George Pauncefort)が、単身長崎を経由して横浜へやって来た。彼はそこでシェイクスピア、ディケンズ、トウエインの作品を中心とする朗読会を何度か開いたのである。⁽²¹⁾年末の朗読会にハムレットの独白が取上げられ、ワグマンがそれを聴きこの漫画の場面を思いついたということは有り得ることである。

ポーンズフォートが何故単身来日することになったのか分らない。彼は若い頃から旅役者の一座に加わり、一八六〇年代にはアメリカへ渡り各地を巡業していたという。当時イギリスのアーヴィング(Henry Irving)の劇団にポーンズフォート夫人という女優がいたが、⁽²²⁾あるいは彼と縁の女性であったか。ともあれ来日した時彼は既に五十歳を越していた。

彼はその後その地に住みつき、「シェイクスピア・イン」という名の旅館を開いた。それは最初は戸塚にあったが、後に根岸の競馬場近くに移された。彼は旅館経営のかたわら、アマチュア劇団の指導をして余生を送り、一八九八年九月十二日に亡くなった。

「ハムレットさん」の漫画は、表題、挿絵、ローマ字訳の三つの部分に分割できる。表題が事実を伝えるものでないとするのは、この漫画が上演とは関係なく、別の意図をもって描かれたものだとすることで、雑誌の中で見る限りそう考えるのがもっとも妥当だというのがここまでの結論であった。しかしたとえ漫画としての面白味に欠けるとしても表題が事実を伝えるものだという可能性もこの段階では否定できない。それで最後にこれまでと視点を交え、日本語上演の可能性そのものからこの問題を詰めておこう。

表題が事実を伝えているとして、挿絵とローマ字訳との関係で、実際の上演の写し方に三つの場合が想定できる。

(一) 挿絵、日本語訳共に実際の上演を写した場合。

(二) 挿絵は実際の上演を写したが、日本語訳は創作である場合。

(三) 日本語訳は実際の台詞を写したが、挿絵は創作である場合。

そこで、それぞれの場合の上演の姿を推定し、可能性の薄いものから消去する方法で論を進めることにしよう。

順序を変えて、先ず(二)の場合から検討しよう。挿絵は上演のスケッチ画である。日本語訳は元々まともで耳で聞いて充分理解できるものであったが、それでは漫画にならないので作りかえられたものだとしよう。そのような上演は、外国人相手に行われるはずはなく、西洋の劇を紹介する意図をもって日本人観客の前で行われたものと考えなければならぬ。そうなればその劇について何の予備知識も持たない観客に独白だけの上演は考えられない。当然通し上演であったはずだが、それも挿絵の侍姿から見ても、忠実な原作上演というよりは、翻案上演であつたらう。そしてそれは日本人の経営するいずれかの劇場で上演されたものではなく、しかしそのような上演可能性はなかったと断じてよい。第一にそれ程の上演であれば何らかの反響が記録されてしかるべきである。第二に翻案は原作を換

骨奪胎しプロットを借りるのを本務とするものであるから、主人公の内面告白である独白部は真先に削除の対象となる。十数年後に上演された仮名垣魯文脚色『葉武烈士倭錦絵』（一八八六年）を見ればそのことは明かである。つまり肝心の挿絵の場面がないことになるのである。

それでは漫画に記されてある日本語訳にほぼ近い上演があったとする場合はどうか。この独白を初めて聞く日本人にとっては、その訳では皆目、分らないはずである。原文は行から行へわたる、いわゆる句わたり(cajambent)で、揺れ動く心の葛藤を表現しているのだが、翻訳は行毎に逐語訳しているものだから分らないのが当り前である。これは日本語も堪能で原文を空んじている英米人を相手にふざけたものと考えるのが妥当であろう。そうしなければ作者ももちろん日本人ではない。原文を下敷にして珍妙な日本語を羅列するというのであるから、笑いを醸すには短かい程効果的である。したがって全編上演はおろか三幕だけの上演も考えられないから、独白場面だけを取り上げたものとしなければなるまい。

さて、そのような独白部の上演が、(一)の場合のように待姿で、しかも「シバキゴヤ」で行われた可能性は極めて薄いとしてよい。当時居留地で「シバキゴヤ」といえば、当然ゲイアティ座である。たしかに当時そこで上演されていたものはバールスクやファースばかりで、そのようなふざけた一種のパロディが上演される素地はあった。しかしそれまでそこでシェイクスピアが取上げられた形跡はない。初めての上演は一八七五年一月アマチュア劇団による『ヘンリ四世』であった。⁽²³⁾それも三場仕立て他の作品との二本立というからには、恐らくフォルスタフの出でくる場面を中心とした抜萃上演であつたらう。シェイクスピアの原語による上演がいかなる形においてもなかったというのに、日本語によるパロディが上演されたであろうか。仮にされたとしても独白部だけなら僅か二分足らずの短かいもの、それをわざわざ衣裳を着けて演じたとは考え難い。

それでは(三)の挿絵が作りものである場合、つまり衣裳を着けず、何らかの場所で行われた可能性はどうか。それならありそうである。当時の居留外人にとってシェイクスピアは舞台劇というより読み物であった。だから前述のような朗読会で、シェイクスピアを取り上げたのである。そのような情況において名台詞のパロディが生れたとしても不思議ではない。しかし問題はそれを何故日本語でやるのかということである。日本語の習熟度に差のある人々が大勢集まるような会合でそれが披露されたとすればパロディとしての効果は期待できず、むしろ額面通り日本語の未熟さのみが嘲笑されることになってしまう。まして日本人を歓迎する場で上演すれば聲をかうのが落ちである。せいぜいのところ気心の知れた仲間内のくつろいだ会合の席上、なかば即興的に朗唱してみせたというような場合しか想定出来ない。そうなればそれが人々の話題にのぼることはなかったろうから、たとえそのような上演があったとしてもこの雑誌の素材として取り上げるには不向きである。実際の出来事を取り上げる時、購読者の大半が知っているこそ漫画になるのだ。ワーグマンがその珍訳を自分の創作だとして、「剽窃」したというのであれば話は別だが、やはりそのような訳が存在しなかったとするのが妥当であろう。

こう考えてくれば、「ハムレットさん」の漫画に素材を提供したと推測されるような日本語訳による上演はいかなる形においてもなかったとしてよい。やはりそれはワーグマン自身の創作であっただろう。

註

- (1) 一八七四年四月号以前には刊行月が明示されていない。この号の中には年始の挨拶に出かける洋服姿の日本人たちが画かれているので、一月の刊行を考えてよい。なおこの小論には『復刻版ジャパン・パンチ』（雄松堂、一九七五年）を利用してもらったが、その「解題」を見る限り刊行月の確認作業は大変なようである。
- (2) 隈元謙次郎「黎明期の日本洋画界とワーグマン」（『復刻版ジャパン・パンチ』付録「解説」に収録）参照。
- (3) 横浜市編『横浜市史』第三卷上（横浜市、一九六二年）、三九三―四頁。
- (4) 竹本匡彦『横浜ゲーテ座』（横浜市教育委員会、一九七八年）、二四頁。
- (5) たとえば一八七七年九月号に西南の役で西郷軍に味方した横浜の主要欧字新聞四社の主筆が切腹する図があるが、翌月号ではそれに抗議した「ジャパン・ヘラルド」主筆が漫画にされている。
- (6) たとえば、「空騒ぎ」（一八六六年第十二号）、「ヴェロ―ナの二紳士」（一八八六年一月号）といった表題に用いられたもの、絵に添えられた「われわれ三人、今度会うのはどこぞ?」（一八七五年三月号）といった説明文。
- (7) J・R・ブラック著、ねず・まさし他訳『ヤング・ジャパン』（東洋文庫・平凡社、一九七〇年）第三卷、一三九頁。
- (8) 竹本匡彦、前掲書、九七頁。
- (9) 同上書、一〇四頁。
- (10) 同上書、一五六頁。
- (11) 蛸原八郎『日本欧字新聞雑誌史』（大誠堂、一九三三年）、八一―八六頁。
- (12) 一八七五年八月号、同年十一月号参照。
- (13) Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese* (Hakubun-sha, 1890), p. 270. (高梨健吉訳『日本事物誌』（東洋文庫・平凡社、一九六九年）は第六版（一九三九年）に基づくものである、この項に關しては初版の方が興味深いので、初版から引用する）
- (14) アーネスト・サトー著、坂田精一訳『外交官の見た明治維新』（岩波書店、一九六〇年）上巻、二二頁。
- (15) B. H. Chamberlain, op. cit., p. 270.
- (16) 荒木伊兵衛は『日本英語学書志』（創文社、一九三二）、二二―二四頁において土橋觀英「横浜ことばの思出」を紹介している。それによると連想的に日本語を早くのみ込ませるための真面目な本として受けとられていたようである。
- (17) 重久篤太郎『日本近世英学史』（教育図書、一九四一年）、八五頁。小玉晃一・敏子『明治の横浜』（笠間書院、一九七八年）、一〇頁。
- (18) 一九世紀にはやった語学学書法と Heinrich Gottfried Ollendorff が創始した。文法規則は出来るだけ少なく

- し、会話を習得するうちに文法が分るよう仕組まれた。
- (19) M. Paske-Smith, *Western Barbarians in Japan and Formosa in Tokugawa Days 1603-1868* (J. L. Thompson and Co. Ltd., 1930), p. 225 and p. 335.

(20) とりわけ一八七六年六月号では辞書の書評が取り上げられてゐるのは注目すべきである。同年出版された

Ishibashi and Satow, *An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language* に同じである。石橋政方と Ernest Mason Satow を合して、著者は 'Konshin Ishimasamasonsatokara' (石政メーン・サター方) となつてゐる。正誤表や補遺表が長々とついているが、肝心の日常必要な言葉が数多く抜けていて、実用には適当なほど酷評する。そして、先日も 'an iron screw covered over' を求める外人が適切な日本語が分らず 'Kinono sinjo, rope yarn shimeau' と云つのを聞いたが、完璧な辞典の完成が待たれると結んでゐる。

(21) 竹本匡彦、前掲書、八九—九三頁。

- (22) George C. D. Odell, *Shakespeare from Bettleton to Irving* (Charles Scribner's Sons, 1920), vol. 2, p. 374. 中には 'Mrs. Pauncefort' として出ているが Clement Scott の劇記では 'Miss G. Pauncefort' として出ている (Clement Scott, *Some Notable Hamlets* (Benjamin Blom, 1900, rep. 1969)). 記述の内容から明かに同一人物である。Scott によれば一八七四年十月

の公演では 'Miss' となつてゐるが (五六頁) 一八八五年五月の公演では 'Mrs' となつてゐて (二七六頁) いずれの場合もガートルード役を演じてゐる。

(23) 竹本匡彦、前掲書、九二頁 (図版 53)。